



笠原鉢

多治見市文化財保護センターでは、平成18年の多治見市と笠原町の合併を機に、旧笠原町所蔵の採集品の整理を進めてきた。今回の企画展ではこうした資料に加え、瀬戸市内の窯跡や実際に使用されていた消費地での発掘調査出土品を交えて展示し、絵付、生産、流通といった各視点から、笠原鉢を紹介する。

「笠原鉢」とは、江戸時代前期から中期にかけて（17～18世紀代）美濃と瀬戸で焼かれた折縁の大平鉢だが、特に笠原（現・多治見市笠原町）においてその生産が盛んであったことが広く知られ、いつからかこの通称で呼ばれるようになった。これらの多くは口径が30センチを超える大型（平均約33センチ）で、内面に軽妙かつ大胆な鉄絵を大きく描き、長石釉を施して緑釉を垂らし掛けるのが特徴である。

一般に、笠原鉢は終末期の織部焼と位置づけられることが多いが、既に茶陶から離れて日常使いの雑器となっている。また、織部焼のような意匠の斬新さはなく、草を描いた鉄絵の構図を数種のパターンにまとめることが可能なため、奇抜な自由さといったものは認められない。しかし、大鉢の内面をいっぱいに使って描かれる絵付けの筆致は、のびやかなもの、繊細なもの、大らかなもの、それぞれに個性が発揮されており、笠原鉢の最大の魅力である。



笠原鉢の絵付

笠原鉢の最大の特徴は、内面いっぱい大きく描かれた鉄絵にある。その構図にはいくつかのパターンがあり、笠原のものはよくそれを守っている。すなわち、笠原の窯ではほとんどすべて、^{あし}葦または^{すすき}薄を2本描くもの、それらを3本描くもの、^{あし}葦または^{すすき}薄の左側に葛ないし「あぎなし」を描いており、ごく少数において松や、竹または笹、種類の特定できない草、茸のような絵が認められるに過ぎない。

瀬戸の窯では、ややヴァリエティに富んでいる。穂先を粒状に点で表現するイネ科の植物や、花の咲いた菖蒲を描くものなど、笠原にはみられないモチーフも選択されている。

生産地不明の資料の中には、鳥絵がある。長頸の水鳥が大きく羽を広げた絵のほか、このパターンにおいて葛の三葉（あぎなしの花弁）を配置する箇所に、行列をなす小さな鳥を描いたものがある（豊蔵資料館所蔵品および、三重県鈴鹿市・神戸中学校遺跡出土資料）。これらの鳥は葦（薄）の大きさに比べ非常に小さく、向きも不自然である。



鳥



稲荷窯

薄



葦



稲荷窯

葦と葛（あぎなし）



西窯

松



竹（笹）



西窯

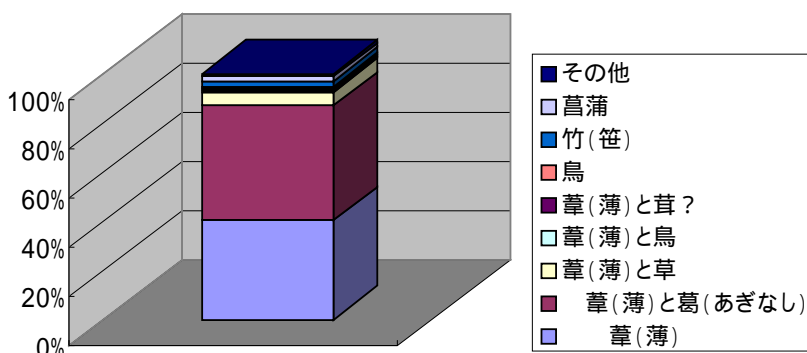
葦



西窯

茸？

笠原鉢の絵付



笠原では、鉄絵を施さない鉢も生産されていた。これらは垂らし掛けされる緑釉が文様の主体をなすかのように「の」字形などに掛けられ、鉄絵を施した一般的な笠原鉢よりも、小ぶりの製品である。笠原鉢のほかにも、こうした無文の鉢の需要もあり、主に西窯や念仏窯で生産が行われていた。



念仏窯

笠原鉢の生産

笠原鉢を生み出すにいたった背景には、志野や織部で培われた美濃焼の伝統があった。これらには笠原鉢のような大型の製品はあまりないが、鉄絵や釉薬の技術があったからこそ、生産が可能となったのだろう。志野や織部の一部には、笠原鉢と共通する絵付を施されたものもあり、そのつながりを感じさせる。

笠原鉢が採集された笠原町の窯跡には、次の各窯がある。稲荷窯（神戸区）標高190メートル前後の丘陵西斜面に位置する。窯体構造は連房式登り窯とみられるが、発掘調査がなされていないため、詳細は不明である。採集された遺物の年代観は江戸時代前期から後期まで長期間にわたり、同一地点で生産が継続したらしい。稲荷窯で焼成された製品のうち不良品を廃棄した物原での採集品には、碗・皿・鉢・杯・德利・瓶・壺・水注・香炉・仏

餉具などの製品があり、ほかに窯道具がある。後期には、^{はつき}炆器質の染付製品も焼成していたようだ。

西窯（釜区）標高200メートル前後の丘陵の先端部東斜面に位置する。窯体構造は連房式登り窯とみられるが、発掘調査されていないため、詳細は不明である。西窯の採集資料としては、江戸時代前期の碗・皿・鉢・德利・灯火具・香炉・蓋・水注といった製品のほか、窯道具がある。西窯の笠原鉢には、松を鉄絵で描いたものが含まれており、稲荷窯や念仏窯にはみられない鉄釉との掛け分け、釉薬を用いない焼き締め

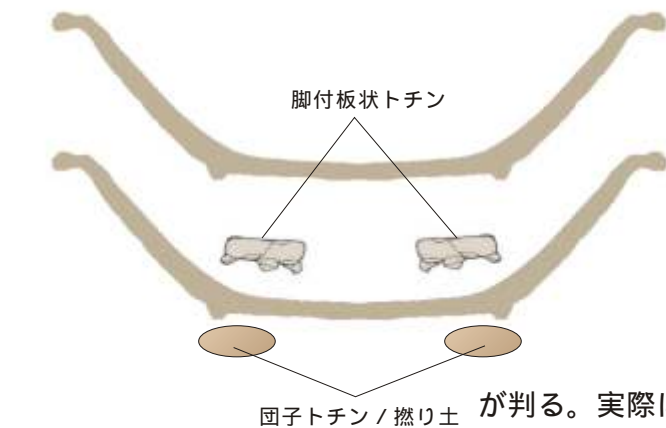
の製品もある。念仏窯（釜区）西窯と同じ丘陵の標高約180メートルの北斜面に位置する。窯体構造は連房式登り窯とみられるが、宅地化によって未調査のまま消滅し、物原の一部が残存するのみである。念仏窯で採集された遺物の年代観は、稲荷窯と同様に、江戸時代前期から後期にわたる。採集品には碗・鉢・德利・壺・香炉・仏餉具などの製品のほか、窯道具がある。

少量だが、^{かんばやし}窯林窯や^{むかいじま}同島1号窯からも採集されており、笠原で盛んに生産されていたことが窺える。

瀬戸の笠原鉢は、^{あろ}尾呂窯・窯元A窯・かみた窯・^{びん}瓶子窯などの発掘調査で出土例がある。形状や絵付、施釉など、笠原のものによく似ているが、40センチを超える個体もある。瓶子窯では笠原と同様、手首を使って筆をなめらかに滑らせる繊細な絵付けを行っているが、瀬戸では概ね、太筆で鉢の内面いっぱい大胆な構図で描く傾向があるようだ。穂を粒状に表現したり、菖蒲を描くのは、瀬戸にみられる特徴である。

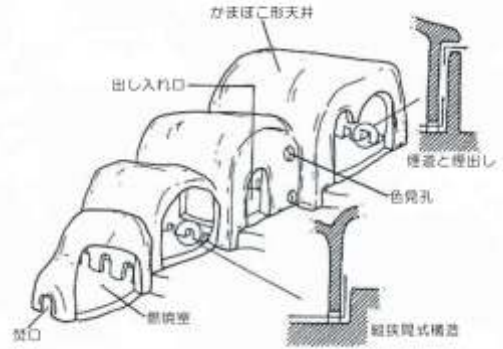
他に、旧多治見市域や土岐市、可児市、関市所在の窯跡からも、多くはないが出土している。

笠原鉢は窯詰めされる際、同じ笠原鉢どうし重ねられ、焼成された。製品の内面を観察すると、「」状に釉薬の剥がれた部分があり、三脚の脚付板状トチンを用いたこと



が判る。実際に、窯跡の物原で採集された資料には、脚付板状トチンが熔着したのものがある。高台部分には、粘土を卵形に丸めた団子トチンや、紐状の撚り土が熔着したものがみられるため、こうしたトチンも多く使用されていたようだ。

美濃の連房式登り窯模式図 (江戸時代中～後期)



笠原鉢最盛期の江戸時代前期は、斜め狭間であった可能性がある。

企画展

笠原鉢

平成23年1月11日(火)
～6月30日(木)



多治見市文化財保護センター

切り取ると、しおりになります

笠原鉢の流通

中国では元代以降に大皿が製作され、特に16・17世紀に盛んになる。これは、トルコなどイスラム系遊牧民の多人数で料理を囲んで食事する習慣の影響を受けたためといわれている。これらは染付（青花）や色絵の磁器の大皿であり、日本や東南アジアなどの周辺国をはじめ、遠くヨーロッパでも人気を博した。

中国製磁器の大皿は、日本では大名など上級武士たちのステイタス・シンボルとして宴会の必需品となって流行し、これらを用いることで宴席の形式にも変化が生じる。唐津や信楽、丹波、備前の各窯もこの流行に同調し、陶器の大皿や大鉢といった大型

の製品が生産された。17世紀の笠原でも、美濃の伝統を基盤に笠原鉢がつくられ、瀬戸や周辺地域へと波及した。笠原鉢は、はるばる江戸や名古屋などに運ばれ、武家屋敷跡を中心とする遺跡の発掘調査で出土している。大皿や大鉢の流行に伴って、料理を取り分けつつ酒を飲む習慣が広まり、ややくだけた宴席が増加するとその需要が増えたとも言われている。江戸や名古屋の城下に暮らした、多くの侍たちにも愛されたことだろう。

巨大都市・江戸や名古屋では、大量の陶磁器類が廃棄されている。笠原における資料が採集品であり、窯跡も発掘調査された例がないため、いつ使用されて廃棄されたか（大規模な火災、文字資料、遺構の年代観）を調べると、製作された年代を推し量る手がかりを得ることができる。これにより、笠原鉢は比較

的浅くて丸みのあるものから、深く「八」の字形に大きく開く器形へと変化することがわかる。

江戸における笠原鉢は、現在の千代田区や中央区、新宿区、文京区の20以上の遺跡で出土し、大名（水戸藩・加賀藩）や旗本の屋敷から同心組屋敷（御弓組など）までの上級・下級の武家屋敷で用いられ、日本橋や街道沿いの大店や町屋からも少量だが出土している。また、厚木宿（神奈川県）での出土の報告もある。

名古屋における笠原鉢の出土は、名古屋城三の丸遺跡（名古屋市中区）をはじめ、^{たてみつくら} 豎三蔵遺跡（同・中区栄）、白川公園遺跡（同）、伊勢山中学校遺跡（同・中区正木）、^{ていよういん} 貞養院遺跡（同・西区幅下）、^{きせいちょう} 貴生町遺跡（同・西区貴生町）から出土したという報告がある。上級（三の丸遺跡）・下級（豎三蔵遺跡・白川公園遺跡）の武家屋敷からの出土が圧倒的だが、貞養院遺跡のように美濃街道に沿う町屋で出土した例もみられる。

貴生町遺跡では、水田耕作土中からの出土で遺構に伴うものではないが、城下町以外における使用の可能性のある資料として、注目される。

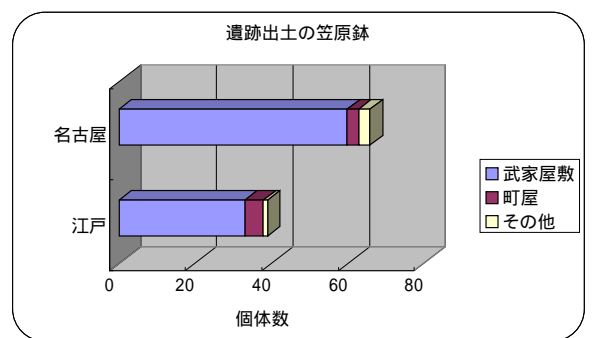
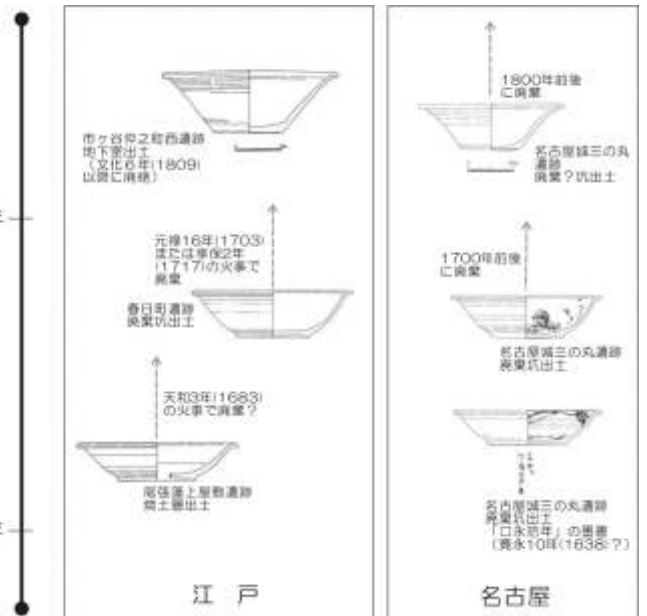
参考文献： 出光美術館 編 1998

『大皿の時代展—宴の器—』

各遺跡の発掘調査報告書については割愛する

本展の開催にあたってご協力、ご指導を賜りました皆様に、心より感謝申し上げます。

切り取ると、しおりになります



企画展

笠原鉢

平成23年1月11日（火）
～ 6月30日（木）



多治見市文化財保護センター

多治見市文化財保護センター企画展

笠原鉢

直径33センチのキャンパス

展示期間：平成23年1月11日（火）～ 6月30日（木）

開館時間：午前9時～午後5時

休館日：土・日・祝日

入場無料

発行 多治見市教育委員会・文化財保護センター
〒507-0071 岐阜県多治見市旭ヶ丘10 6 26
(0572) 25 8633 FAX (0572) 24 5033
URL <http://www.city.tajimi.gifu.jp/bunkazai/>